

130年続いてきた中学校部活動の大変革 部活動の地域展開 改革実行期間へ

文科省が昨年12月、主に公立中学校を対象とした「部活動改革及び地域クラブ活動の推進等に関する総合的なガイドライン」を公表しましたが、いよいよ来年度からは6年間の「改革実行期間」がスタートします。休日は原則すべての部活動において地域展開を目指しています。

この問題は『おんがく広場』第291号(※)でも取り上げましたが、実施にあたっては受け皿となる地域団体、指導者、学校、保護者、そして主役の生徒たち、場所・費用など多くの課題が山積しています。

現在、急速な少子化や働き方改革などによって学校単位での部活動が困難となっています。中学生人口は現在約322万人、30年前に比べて166万人減少し、10年後にはさらに60万人減少すると予測されています。スポーツ庁によれば、中学生の運動部活動への参加率は以前70%台で推移していた男子の参加率が、2024年度には64%まで低下、女子は48%に減っています。

▼新たな取り組み例 コベカツ

神戸市では、中学生が放課後・休日に校区の枠を越えて、スポーツ・文化芸術活動をはじめ、さまざまな活動に参加できる「コベカツ KOBE◆KATSU」という新しい取り組みを2026年度よりはじめます。

従来の運動部・文化部のほか、ボルダー、ダンス、釣り、料理など子供たちが「やりたいこと」のニーズに合わせて、大会やコンクールへの出場を目指すスポーツや文化活動から、趣味や交流を楽しむ活動、社会貢献活動まで、幅広い選択肢があります。

①地域の幅広い団体が主体となり、中学校の施設等を活用し、子供たちに活動の場を提供／②学校の枠を越え、子供たち自身が「やりたいこと」を選んで活動／③大人の価値観を押し付けず「仲間と楽しんで活動する」「目標に向けて一生懸命に取り組む」など、子供たちの意向を尊重／④活動団体は登録制とし、教育委員会が公募し、審査を行った上で登録／⑤会費制とし、各クラブの運営に必要な最低限の費用は原則として受益者(各家庭)が負担。

「コベカツ」のコンセプトは、つぎに示すようにこれまでの部活動の枠を広げたものになっています。

- ◎校区を越えて子供たち自身が「やりたいこと」を選んで活動、
- ◎これまでなかった新種目や気軽に取り組める活動などニーズに合った活動の場を提供
- ◎子供たちが活動の主役となり、大人の価値観を押し付けない。

▼新たな取り組み例 女声合唱団がジュニア部門創設

長野市の女声合唱団「スオーノ・コンプリオ」は、2月23日創立10周年記念演奏会を行い、そのなかで、「スオーノ・コンプリオ ジュニア」の演奏が披露されました。「スオーノ・コンプリオ ジュニア」は、昨年10月、新たに立ち上げられたジュニア部門です。

長野市では今年度、中学校の部活動が終了し、地域移行されたことを受け、「大人の私たちにできることを」と、「使命感」を持って中学校合唱部の受け皿となる「ジュニア」部門を設立し、三陽中学校の生徒9人と桜ヶ岡中学校の生徒2人が、週の平日3日と土曜日に三陽中学校で活動しているといいます。女声合唱団のなかにジュニア部門を併設するのはなかなかパワーのいることだと思われます。ジュニアの指導育成は大人に対するのとは異なった方法論が求められるのではないのでしょうか。

▼中学校の部活動は「学校教育の一環」

…学習指導要領改定に向け有識者会議

学習指導要領の改定で、中学校の部活動を「**学校教育の一環**」としている位置付けを維持することが3日、スポーツ庁と文化庁の有識者会議で固まったようです。また部活動に携わる教員の負担軽減のため、働き方改革の推進も総則に明記するとしています。「**学校教育の一環**」とは、教科とは異なる「**教育課程外**」の部活動のことで、顧問らが長時間勤務を強いられる一因ともされてきたものです。しかし、学校教育から切り離されて地域展開した場合、どのような状況になるのか、さまざまな問題が浮かび上がってきます。

▼地域部活動がなくなるとどうなるか？

ところで、中学生の生活から部活動がなくなったらどうなるのでしょうか。帰宅部はとりあえず置いておくとして、まず家庭で過ごす時間が増えるのではないのでしょうか。それ自体は悪いわけではありませんが、部活動のなかで得られる人格形成や体力向上の意義は測り知れないものがあります。スポーツであれば技術の習得、文化活動なら芸術的感性を養うなど家庭ではできないことがたくさんあります。大人になってからでは間に合わないことを、心身ともに成長期にある中学時代に実践できないのはなんとしても避けたいものです。